

豫科練



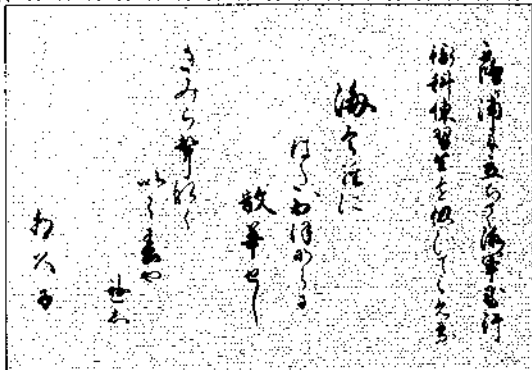
No.464 令和3年

5・6月号

- 連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.6… 2
- 連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…………… 3
- 三四三空隊史⑥…………… 4
- 安部晃さんのこと…………… 7
- 橘学苑高等学校の卒業作品展を見学してきました…… 11
- 卒業作品展「自由・自らへの戒め」「時の人」…………… 13
- 死線を越えて③…………… 15
- 翼を奪われ陸戦特攻隊へ③…………… 17
- 緑十字の白い二番機②…………… 20
- 小林会長寄贈の脇差が展示されます…………… 22
- 寄付者芳名簿…………… 23
- 第五十四回予科練戦没者慰霊祭行事のご案内…………… 23

公益
財団法人

海原会

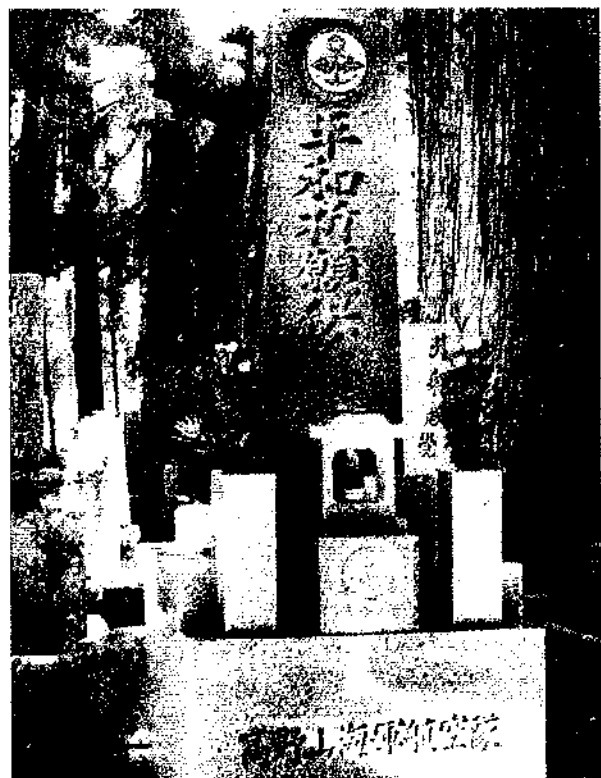


高松宮妃殿下御歌
 霞ヶ浦に立ちて海軍飛行
 予科練習生を偲びてよめる

海はらに
 はたおほそらに
 散華せし
 きみら声なく
 いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 予科練の碑 No.6



高野山航空隊は当初三重海軍航空隊の分遣隊として、昭和19年8月15日に開隊されたが、予科練習生の大量採用のため、昭和20年3月1日に独立航空隊になった。初代司令は千葉成男大佐(兵36)で、終戦迄予科練教育を担当した。

この高野山航空隊より一足早く、現在の天理市(旧丹波市町)に、昭和18年12月1日に開隊された奈良分遣隊(後に奈良空となる)があるが、こちらには記念碑的なものは見当たらないので高野山空の記念碑(写真)を掲載することにした。

この碑は昭和59年に関係者が集い、戦没者と戦後の物故者の供養のために高野山霊園内に慰霊碑を建立したもので、毎年十月第一日曜日に慰霊祭を行っている。

因みにこの航空隊で予科練教育を受けた期は、分遣隊を含み次の各期である。

特飛 5、6、7、8、9、10期の各期

乙飛 24期(高野山空の11、12、13、14期の各期)

甲飛 16期の一部

海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 評世

書簡

(予科練時代 母あて)

真珠湾攻撃第二次攻撃第二集団

赤城九九艦爆隊所属

海軍二等飛行兵曹

坂本 清

十九歳
千葉県

第四期甲種飛行予科練習生

前略、昨日久しぶりに母に会い、非常に嬉しかった。

お婆さんも元氣とのこと、何よりだ。何しろ僅か二時間だったので、つまらなかつた。いろいろと話したようにも思うが、たいしてせんようにも思う。ああなると、話も出んらしい。家の様子も、もつと聞きたかつたが、しかし僕にはただ嬉しかった。僅か二時間だが、非常に愉しい時間だつた。

まあ、あとでゆつくり会える日もあるだろう。その時を待っている。しかし、あんまり来んでもよい。

僕も母ちゃんと別れる時、ちよつと悲しかつた。バス、うまく乗れたかね。菓子、班の者に分けたら、みな喜んでいた。

昭和十六年十二月八日、開戦劈頭の真珠湾奇襲攻撃時に赤城に所属され、九九艦爆の偵察員として搭乗し江草少佐指揮する第二集団(急降下爆撃隊)の、赤城(千早猛彦大尉)第一中隊、第23小隊の三番機として出撃したが、残念ながら敵巡洋艦攻撃時に被弾し自爆戦死された。

第五十四回慰霊祭の詳細は23頁をご参照下さい。

B-29 邀撃戦

市村 吾郎 (四〇七分隊長)

今となつては、発進した基地が松山であつたか、大村であつたかも記憶に定かではないが、飛行隊の総指揮官は後に戦死された菅野大尉であり、戦闘七〇一は一緒であつたかどうかも記憶にないが、戦闘四〇七は私が一番機として数機参加していた。あるいは、我らの温厚隊長の、林 喜重大尉の戦死直後であつたかもしれない。

この日の天候は、雲量2、3の割合に好天候のもと、十数機の紫電改は敵B-29の邀撃のため、南九州の桜島の北東を南に飛行中、前下方に南下中のB-29数機の編隊を発見、菅野指揮官機より攻撃開始の無線電話とともに、「疾風、疾風、上空支援に残れ」と、戦闘四〇七に指示があり、ただちに落下増槽を投下、味方編隊の上空をバリカン運動で支援を開始した。(この

時の指揮官の判断は、敵小型機がB-29の直後に同行していると思つていたのかもしれない)

これと同時に菅野機を先頭に、B-29編隊の直上から矢のような突撃が入るのが確認されたが、次の瞬間B-29の一機がまるで高速度撮影のフィルムをスローで見えるように右のエルロンの内側のヒンジ一つがはずれて飛び散り、同時にあの大きなB-29がゆるやかに大きなきりもみ状態で落下して行くではないか。本当に二十耗機銃の一撃がこれほど威力のあるものかと痛感したことはない。この光景は、三十五年経た今なお昨日のこのように眼底に焼きついて離れない。

B-29 搭乗員魂

この日、かなりの大編隊で北九州に飛来したB-29の邀撃に、J改(紫電改のこと)も数十機の編隊で鶴岡大尉総指揮のもと、戦闘七〇一、戦闘三〇一、戦闘四〇七の順で大村基地を発進。戦闘三〇一は菅野大尉指揮、戦闘四〇七はこの日も隊長不在で、私が指揮したかに記憶して

いる。総指揮官機には、当時開発されてやっと実戦配備となつたばかりの対B-29用ロケット弾を装備していた。

大村基地を発進していくばくもなく、北九州福岡の東方でB-29の大編隊を発見。この中の一つの梯団に対して同時徹底攻撃をするように無線指示があり、戦闘七〇一はB-29の編隊に対して同高度反航ロケット攻撃のため全速で敵編隊の前方に急行、戦闘三〇一、四〇七は直上方攻撃のため戦闘七〇一に続いて全速上昇し、敵編隊の右上方数百米にて同行。敵編隊に支援戦闘機のないことを確認する。

やがて総指揮官機が数千米前方で反転、全機突撃の指示があり、隊形上飛行隊中しんがりを行飛行していた我が隊が、B-29に対して最初に直上方攻撃をするようになった。先ずまっ先に眼に入ったのはB-29編隊の前方に炸裂したロケット弾の真白い爆煙、同時にかすかにみだれる敵編隊の隊形、この時、私を含む数機は一撃を終り、敵編隊の真下にあつて紺碧の空に

輝く銀色の四発大型機を見れば、我が隊の攻撃が効を奏したのか、翼中央より数条の煙霧を後方数十米にたなびかせガソリン漏洩を続けていた。

つぎからつぎと攻撃する味方機の前に、ふたたび高度をとり、左後下方にB-29の編隊を見たときには、敵機が火のかたまりとともに北九州の山中に墜落していった。

かくして九州北部を西から東へ横断、大分上空に達した時には、B-29は三機の編隊となり、中一機はエンジン四基中二基停止、数十米遅れてかろうじての遁走中であつた。私はこの時すでに燃料の残量少なく、残弾にも少々不安があつたので、一機遅れていたB-29の真横に接近、敵機を観察して見たのである。敵搭乗員はあわたたしく搭載物の投下に没頭、全然反撃してくる気配はない。この時、私は、無線電話の故障に気づいて、四回を見わたしたが、鶴岡大尉機以下数機のJ改が執拗に反復攻撃していることを確認した。この攻撃の最中に突に変わった

ことが起つたのである。それは味方J改が一機遅れて飛行中のB-29に反航攻撃をする態勢に入ると見るや、先行していた無傷と思われるB-29はスピードを落とし、遅れていた被弾機の左右にピッタリと編隊を組み、味方機の攻撃に対してその都度、小型機のように機首を向け反撃してくるではないか。この時、敵ながらアツパレなB-29搭乗員魂の片鱗を知らされたのである。しかし、この数分後には太平洋上に墜落していった。

私はこの後、燃料不足のため爆撃で穴だらけになった大分飛行場に緊急着陸し、さきに着陸しておられた菅野大尉と指揮所でお会いする。夕刻近く単機大村基地に帰投した。

空中分解の恐怖

大村基地で、B-29の邀撃戦から帰投して指揮所にいると、整備士が「分隊長ちよつと来てください」という。数分前まで搭乗していた愛機の所へ行くかどうかであるう、座席後方の胴体（口の丸の附近）表面に無数の

皺が見られるではないか。Gのかけすぎか機体の欠陥か、正に空中分解一步手前であった。後日、未帰還列機の柏谷飛長の戦死も、空中分解が原因ではないかとも云われている。もしもそうであったとすれば、戦時中とはいえ、さぞ無念であったろうと悔まれてならぬ。

以上、とりとめもなく思い出すままに記したが、この間戦死した先輩、同僚、部下の活躍の姿を思い浮かべ、あらためてご冥福を祈ってやまない。

林隊長の人となり

山田 利次（山四〇七）

三四三空の隊員でもなかった私は、送稿を何となくちゅうちょしました。が、戦闘四〇七の隊員として出水基地での、林喜重隊長のことが忘れられないので、意を決して寄稿いたしました。

私は、教育期間中教官に、源田中佐については、兵学校での大論争、ハワイ作戦計画、源田サーカスのニックネーム等々のことを、戦訓の講義や雑談として、しばしば聞かされていましたが、源田中佐が旧制中学の先輩とは知りませんでした。

私が十九年七月下旬戦闘四〇七飛行隊（二二二空）に着任後間もない八月のある日、鹿児島基地で林隊長に出身を聞かれ、広島一中は陸海軍に多数進学する有名校だからよく知っている。海軍にも有名な方々がたくさんおられるが、源田サーカスの源田中佐は先輩のお一人だよと教えられ、何か誇りと自信を与えられたような気がしました。

十九年十二月戦闘四〇七が出水基地から松山に移動するまでの在隊期間中に、林隊長と二、三回だったと記憶しております。が、雑談をしたことがあります。この写真は指揮所で気楽に隊長と雑談している時に撮られたもので、略帽（ラポール空のもの）のかぶり方で打ち解けて雑談している様子がかがえるものと思えます。私の在隊期間中においても、めずらしいことです。

林隊長は、十九年八月頃にはすでに、夜間片道攻撃を考えておられました。本土に近づく敵空母の艦載機が発進する前に、零戦でこれを攻撃する方法として、夜間発進して片道攻撃すれば効果的だが、私にやれるかと言われました。夜間飛行は中練で数回の経験があるだけで、夜間に母艦が発見できるでしょうかと質問したら、これから少し訓練すれば夜間離陸はなんとかなどできるし、帰途の燃料を心配しなくてもよいから、洋上で充分索敵でき、そのうち夜が明けてくるから発見できるよといわれました。



前列左 林喜重大尉 右 大塩大尉

私は、片道飛行なら困難な夜間着陸の必要もないので、離陸はできませんと答えました。まだその頃は、閔大尉より二ヶ月も前のことで体当りする話はありませんでした。燃料がなくなるので、敵さえ見付けられれば体当りすることになります。

林隊長の三四三空でのことはかげながら聞いておりましたし、比島からモロタイ銃撃（特攻同然）をされたこと等、私は立派な軍人だったと今も尊敬しております。その上、写真でもわかりますように、今様にいっても人間的な面もありました。

思い出の一つですが、十九年八月か九月ごろ、豊田副武長官が鹿児島基地に飛来されたとき、柳原副長、桃田整備主任と林隊長以下飛行科将校のみ十数名が、ダクラスから下りられる長官を一行横隊になって出迎えましたとき、官氏名を申告するにつれて「予備少尉山田利次」と申告するようにといわれたことを思い出します。

（十三期予備学生前期の実態を視察される意味があった出）

この写真の左側にいる私にとつては、夜間片道攻撃、源田サカスについて雑談した思い出の写真です。



中央 林（喜重）隊長

万年二番機も

今は一番機

原田 秀夫

（四〇七・旧姓中尾）

以下の記述は日時ははっきりしませんが空戦の状況等は、はっきり頭に残っています。

また空戦に参加した時の一番

機以下の名前も記憶がありません。特に名前を記した者は確実に憶えています。ただ私は三四三空では、一番機は本川稔分隊長と石塚光夫分隊長だったように思います。そして私は最後まで二番機でした。

戦記

一、五月上旬頃（沖繩作戦と思われる）

紫電改三十機くらいで発進、屋久島南方にて敵戦闘機と遭遇、空戦。私は戦果なく単機で羅針儀を頼りに帰投す。

一、五月中旬頃（B-29邀撃）

九州北東部にて捕捉攻撃し、約十一、二機の敵機と交戦。最後の一機が両翼付根より火を吹きつつ南下するを攻撃中、ついに右翼が折れ、錐採状態で山中に落下（延岡西方）した。他に二機ぐらい同じ状態（火煙を吹きつつ）で南下したが、それを追わず眼下の落下傘（十数個落下していた）を攻撃した。その時列機の山本（甲十一期）が誤って落下傘を右翼付根付近にひ

っかけ三十纏くらいの損傷を受

け、着陸後飛行長が隊長にひどく叱られたことを記憶している。その後新聞社が来て山本君を取材していた。

足

一、六月上旬頃（PB2Y・補）

五島方面に現われるの報で離陸。敵二機を撃墜（不時着水）。搭乗員が救命ボートで脱出したがそれには攻撃を加えず帰投した。多分大村よりの連絡で他の情報が入ったか？あるいは深追いするなどのことだったのかもしれない。

一、六月下旬頃

五島附近で、敵大編隊が旋回中との報で発進。目的地で探索するも敵影なく、その後哨戒中の大村より、基地が被爆中との無線が入り急ぎ帰投するも、敵影すでになく、飛行場は爆撃で凹凸状態。

連絡により私は陸軍の芦屋飛行場に着陸、待機した。翌日、大村に帰ったが時限爆弾があたり、海で炸裂（海中でも）、海でボラ、チヌ、カマス等拾ったことをはっきり記憶している。

続く



安部晃さんのこと

海原会会員

山形県在住 富澤奈津子

安部晃さんは、大正十二年三月二十三日、山形県上山市にて、陸軍将校の父、母との長男として生を享けました。

旧制山形中学校へと進み、四年時、父の勧めで甲飛予科練を受験し合格。甲種予科練第四期

生として、昭和十四年四月一日、観ヶ浦海軍航空隊へ入隊しました。

当時海軍では、甲飛は「空の将校」、一海兵、陸士並みの待遇と進級」の謳い文句で、全国から大勢の甲飛受験生を集めていました。

安部家では父が軍人でしたから、御息をできるだけ良い待遇で：という思いはあったと思います。もちろん軍国少年で

あったらう彼も、きつと空への憧れもあり、海兵並みという好条件に惹かれた部分は大きかったと思います。

そしていざ入隊してみると：「何とセーラー服の兵隊！一度入隊してしまえば、絶対の軍規で逃げ出すことなど不可能です。これには甲飛入隊の一桁前半クラスのものは一様に「騙された！」と思ったことでしょう…。

おかげで甲飛二期生を主体、四期生たちとの一大ストライキまで勃発してしまいます。(甲飛二期生も若干)彼の心も大いに高ぶり、諸先輩たちと行を共にしたものと思います。

それもそのはずです。当時の若者で上級学校へと進学できるのはわずかで、一部の成績優秀者や裕福な御家庭のみに開くことのできる道でした。そんな成績優秀者をごっそり採用した海軍です。

彼らは、当時は帝大(現在の東大)よりも難関と一時言われていた海兵や陸士、一般の大学だって望めるエリート層の若者たち

ちだったのです。(念を押します)が、御父母様の多大なる御苦労もあってのことです)

それらすべてをまやかしの「好待遇」の為に蹴ったのです。怒り心頭はとてつもなく理解できます。(また念を押しますが、予科練乙飛、丙飛も、中学出身者は大勢いましたし、みな狭き門を潜り抜けてきたエリートでした) 激しいストライキが続くかと思われた中、高まる不満の声や後輩の入隊阻止の檄文作戦は、甲飛三期の分隊長であった少佐による涙を流しての説得により、あっけなく終息を迎えました。彼の入隊、半年後の出来事でした。

その後、何事もなかったかのように訓練に邁進し、無事に予科練を卒業して偵察練習生として厳しい訓練に耐えるのでした。ところが、無理矢理押し込めた思いの蓋をこじ開けてしまったのは父でした。

「進級はまだか？遅くないか？」なんて何気ない一言だったのかもしれません。

子と同じく、親たちも謳い文

句に踊らされていました。そしてそれに気づくこともなく……父にとつては、その言葉は他意などなく、息子の身の心配でしかなかつたはずです。

しかし帰省の度に問うこの言葉は、若い彼を追い詰め、いよいよ父への反抗、暴言となつて表れてしまいました。

彼は非常に美しくずし字を書きました。実に女性的で繊細な文字です。この後にしたためた父への暴言に対する謝罪の手紙は、心が乱されていることがはつきりと分かるほど、乱れ荒い文字でした。

自分たちも頑張つたがどうにかなるものではない、ましてや今は他国とどうなるかもわからない状況で、進級も何もない！というのを、切々と説いていきます。今の自分はもう軍人であつて、「生にすぎなるなんてそんなものは未練だ」とはつきりと書きました。

この手紙の後、無事に偵察練習生としての教程も卒業かと思われた頃：「母危篤」の報が入りました。

休暇を一週間もらい、山形の実家へと急ぎましたが、体の弱かつた母はまだ四十五歳という若さで、彼や沢山の子供たちを残し、天国へと旅立つてしまいました。

彼の履歴書には、「引き続き七日間の滞在許可」という一文だけが記載されています。この一文の中には、一生分は泣いたであろう彼の姿が隠されているはずです。十分にお別れをし、自分の気持ちにケリをつけられたのでしょうか……

昭和十六年九月二十六日には延長教育も終了し、九月八日から横須賀に帰港していた空母翔鶴への乗り組みを命じられました。そして彼がそこで行うことになつたのは、発着艦訓練でした。その後翔鶴は、昭和十六年十一月に内地を出港します。

超高速猛訓練を受けた甲飛四期生たちは、日米開戦、昭和十六年十二月八日でいよいよ登場します。技術の獲得が大変な操縦員の四期生もおお、どれだけ鬼のような訓練を受けたのだからかと少し気の毒になつてしま

います……

電信員として彼も開戦で初陣を飾りました。乗機は九七艦攻。操縦、戸田儀助兵曹（操縦四七）、機長で偵察、松本頼時飛曹長（偵練二二）、電信、安部晃兵曹です。（五二小隊一番機）

この日、郷里と予科練の先輩で、同じく翔鶴乗り組みだった、甲飛三期、児玉清三兵曹も電信員として初陣でした。

十二月八日を無事に生き抜いた彼らは、その後艦と共に十二月二四日、呉へと帰ってきます。十二月十日付けで家族へ手紙を書いていきます。布哇（ハワイ）空襲に参加したこと、内地へ戻るが今後も引き続き作戦に参加することなど、興奮冷めやらぬ状態であろうことが伺える内容でした。

呉から別府へと移動し、ここでもまた手紙を書きました。十日に書いた手紙の返事を受け取つたこと、正月祝いをし雑煮を食べたこと、慰問袋を初めてもらい嬉しかったことなど……

この時、今も御実家に残る、ハワイへ締めていった鉢巻きを

一緒に送りました。この鉢巻きには、彼の美しいくずし字による歌が書かれています。亡くなられたお母様は歌をとても好みました。彼もまた母に似て歌が好きだったそうです。美しいくずし字も母に似たのでしょうか？

彼の弟さんは、この鉢巻きを本当に大切にしました。時間がたち汚れが目立つてきたことから洗濯をしたところ、ぐしゃぐしゃになってしまったそうです。困り果てアイロンをかけてみると、なんと今度は茶色く焦けてしまいました。そのため残された鉢巻きは茶色く変色してしましますが、今も御実家にて大切に保管されています。

昭和十七年一月五日、翔鶴は日本を発ち、一月十四日にはトラック島に到着。

一月二一日には東部ニューギニアのマダン攻撃に参加。

四月五日く九日はセイロン沖海戦。彼は九日に出撃しました。この日のペアは、操縦、戸田兵曹、偵察、児玉清三兵曹（甲飛三）、電信、安部兵曹でした。（四

二小隊二番機

これらの戦いの間、また家族へ手紙を残しています。戦争が本格的に始まり本土から離れてゆくほどに、彼の手紙は妹弟にあてた内容が増えていきました。

すぐ下の妹は、母のいない家の中を一人で切り盛りしているし、それより下の弟妹たちはまだまだ幼い。この妹に一番負担をかけていることは十分わかっていても、戦争の中で生きる自分には何一つ見らしいことができないことを嘆いています。できるのなら兄さんも手伝いたいのだが、と……

そのためか、南国でヤシの葉が烏陰に揺れてキラキラして綺麗なこと、飛び魚が海面ストレスに跳ねること、地平線に沈む真っ赤な太陽のこと、艦上で見える星空のことなど、沢山の美しく珍しい情景を書き綴っています。「感傷にひたりつつも、波と雲と毎日毎日暮らしているよ」と伝えることで、せめて兄として心配をかけまいとしているように感じます。

彼にとつて妹弟は、この戦争

で命を懸けて守るべき大切なものでした。

そして五月七日、八日の珊瑚海海戦を迎えます。ペアはセイロン沖海戦時と同じでした。(四二小隊二番機)

児玉兵曹と同期、岸田清次郎兵曹(機長、菅野兼蔵飛曹長、操縦、後藤継男兵曹)たちの命がけの索敵により、攻撃を成功させ無事に帰艦することができました。

しかし母艦である翔鶴は大破。この戦いの後は大々的な修理が必要となり、呉へと帰ることになってしまいました。その間、搭乗員たちは配置替えや次期作戦までの基地訓練となりました。館山空での訓練中、ご家族からの沢山の手紙を受け取ることができ、彼はそれまでの戦いのことを手紙に書きました。

「あの十八万馬力の「サラトガ」「ヨークタウン」を主力に、之に戦艦、巡洋艦、駆逐艦計十四隻の輪形陣の真つただ中へ、高角砲・機銃・主砲までぶっばなす弾幕を突破して「サラトガ」(実際はレキシントン)へ魚雷

一発に命をかけて突っ込んで見事命中した時の気持ちは何とも云えません。敵艦から撃つ火が真つ赤になって見えるし、機銃の曳痕弾が真つ赤な尾を引いて前後左右から集中する。文字の如く雨霞とはあんなものと思います。海面到る処で水柱が上る。空は高角砲弾で焦げる程に黒煙が無数に上っている。海戦の物凄いは陸戦の其の比ではありません。」

特に珊瑚海海戦の戦いの凄まじさは手紙であっても伝わってきます。この手紙が家族の元に残る最期の手紙となりました。

昭和十七年八月十四日、翔鶴は日本を出撃。

搭乗員の顔ぶれも一新され、翔鶴最大の戦いへと向かいます。転勤がなくそのまま艦に残った彼ですが、最期の日まで出撃の記録がありません。南国特有の病気がかかってしまったのでしようか……。今ではもうわかりません。

十月二十六日、南太平洋海戦。操縦、岡崎行男兵曹(甲飛二)、偵察、伊藤光義兵曹(甲飛二)、

電信、安部兵曹。(四二小隊二番機)

ペアが変わりましたが、ゆき足のある岡崎兵曹、温厚な伊藤兵曹先輩二人の元、安心できたことでしょう。

○四五〇 敵機動部隊発見

○五三〇 九七艦攻二〇機、

零戦四機が発進

○六五三 攻撃隊が敵を発見

○七〇〇 攻撃開始

機長、伊藤兵曹の二番機は、

小隊長鈴木中尉機の左側後方を飛ぶ形です。

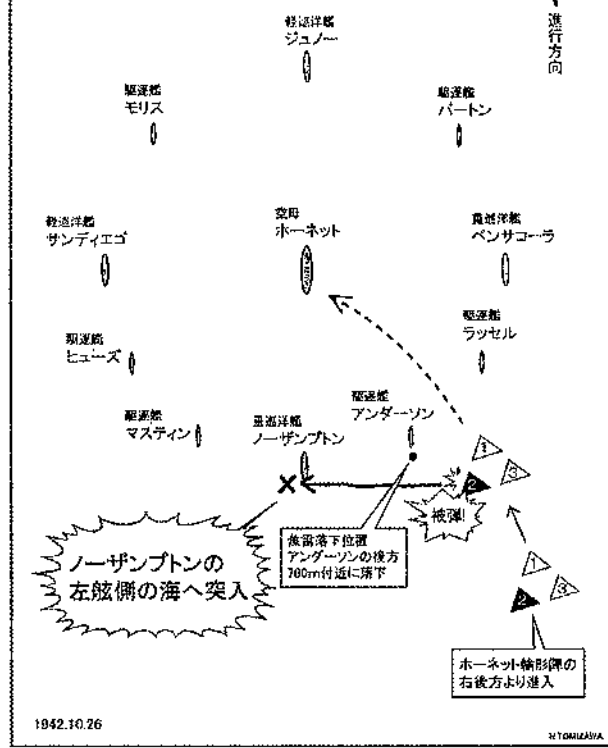
空母ホーネットの強靭な輪形陣を突破せねば攻撃はできません。

ホーネット右後方の駆逐艦「ラッセル」と同じく「アンダーソン」の間を突破しようとした四二小隊でしたが、左側を飛行していた伊藤機に対空砲弾が命中しました。

この時の衝撃で、駆逐艦「アンダーソン」の後方に魚雷が落下してしました。

伊藤機はそのまま左に傾きながら、ホーネット後方の重巡洋艦「ノーザンプトン」の左舷側

南太平洋海戦時
空母ホーネット 輪形陣



海上に突っ込みました。
魚雷落下後、伊藤機は急激に
向きを変え、重巡洋艦「ノーザ
ンプトン」へと向かうような動
きがあったそうです。敵艦へ体
当たりしようとする岡崎兵曹が操縦
桿を動かしたのか、もはや操縦
不能であったのか……。

三番機は雷撃を敢行し命からが
ら回避。激しい戦いが終わり、
戦死した彼はもちろん還ること
はありませんでした。
十一月七日、横須賀に帰港し
た翔鶴の格納庫にて、南太平洋
海戦での戦没者の葬儀が執り行
われました。
残された父のもとには、翔鶴

艦長であられた有馬正文大佐
(階級は当時)より、「壮烈」と
書かれた艦の甲板であつらえた
板が、弔辞、香典と共に届けら
れました。その板は壮絶な戦い
の銃弾の痕がそのまま残るもの
でした。
父はその板の裏に、艦長の弔
辞のすべてを書き写しました。
「軍隊になんぞ入れなければよ
かった」
彼の死後、時間が経てば経つ
ほど、自らが勸めて入隊させた
ことを悔やんだそうです。
安部家はあまり写真を撮らな
い家であつたようで、彼の写真
は数枚しか残っていません。そ
のことが余計に御父様の悲しみ
を募らせた理由でもあつたよう
に思われてなりません。
最後の帰省の時、彼は父に「酒
でも一緒に飲みましょう」と誘
いました。
安部家は大変な酒好きの家系
で、実は彼も帰省の度に隠れて
飲んでいたということが手紙に
も記されていきました。亡くなつ
た母はそれが心配で仕方がなかつ
たようです。未成年であつた

彼に、父はまだ駄目だ、と断り
ました。
彼が戦死した後、「あの日は別
れにきたのだ、別れの盃のつも
りだったんだ」何故あの時酌み
交わしてやらなかったのかと、
いつまでも大切な長男の死を悼
みました。
今から六年ほど前、初めて彼
の御実家にお邪魔しこれらのお
話を伺いました。
弟さんはすでに鬼籍にはいつ
ておられ、ご対応いただいたの
は弟さんの奥様でした。
戦後に嫁がれた義妹さんは、
義兄である彼とは直接の面識は
なかつたものの、義父やご主人
から常に彼の話を聞いてきたそ
うです。
私が何度か訪ね、彼の最期を
お知らせした日、「父と夫が生き
ているうちに聞かせてやりたか
つた」と、寂しそうにおっしゃ
つた姿が忘れられません。
私は彼を知つて初めて「予科
練」というものを勉強しました。
それまでも海軍航空隊について
勉強はしていましたが……
数年経って初めて上浦での慰

靈祭へ参列させていたのだと感
き、「やっと会いに来れた」と感
じました。

私をここへ連れてきてくれた
のはまぎれもなく、晃さんです。
あなたを知って、ご遺族に会っ
て、お墓へ何度も何度も会いに
行って、泣きながら最期を知り
…。お墓へ会いに行く度、いつ
も悩みや弱音ばかりこぼしてご
めんなさい。

でもあなたは、私の山形での
きようだいのように大切な人で
す。これからも、何度でも会い
に行きますからね。

いつか、私もそちらに行くで
しょう。その時は大好きな山形
の美味しいお酒と一緒に思う存
分飲みましょう！(私もお酒が
大好きです) 晃さん。これから
もずっと見守っていてください。
頑張りますから。

追伸

これは書くべきか悩んだこと
なのですが…

何度目かのお墓参りで、晃さ
んの大好きなお酒を持っていっ
たのです。

菩提寺の近くにあるコンビニ

でお酒を買いました、車を停め
て駐車場から歩いて墓前へ。

「晃さん、今日は大好きなお
酒を持ってきたんですよ」
と独り言を言いながら、ワンカ
ップの蓋を開けました。

すると、まるで炭酸ジュース
かー？と思うぐらい、お酒が噴
き出したのです。あわわわ！と
慌てました。お酒が大量にこぼ
れてしまい、「晃さん、ごめんね
ええこぼしてしまっただけ」など
とブツブツ言いながらお参りし
ました。ですがよくよく考えて
みたら、お酒があんなに噴き出
すわけがない…。

もしかして、ひよつとして…
喜んで下さってたんですか？
もしそうであれば、この上なく
嬉しい出来事です。

ただ、安部家は皆さんお酒好
きの酒豪です。どなたが喜んで
下さったかまでは分かり兼ねる
私です(笑)

(終わり)

橘学苑高等学校の卒業作品展を 見学してきました。

海原会のただ一人の高校生特
別会員(当時)である、橘学苑
高等学校デザイン美術コース三
年生Mさんの卒業作品展を見学
してきました。

Mさんは一年前、海原会のホ
ームページから自分は高校三年
生ですが会員になれませんかと、
問い合わせをいただきました。
海原会の会員は専門学校生以上
を対象としましたが、両親
のご承諾を頂ければということ
で昨年8月に晴れて海原会唯一
の高校生会員となりました。

Mさんは入会の動機について
次のように語っています。

「海原会も様々な理由で退会さ
れてしまう方が多かったです。
ね。私が、SNSを通じて知り
合った方も、「旧軍の関係者も
亡くなられてしまう方が多くて、
直接お話を聞くのが難しい」と
話しておられました。」

後継者がいなければ会も尽き
てしまいますし、難しい問題で

すね。こうした会がいつしか消
えてしまうのでは、ということ
を考えると怖いすね。

私はまだまだ本当に未熟者で
すが、過去を見ずに未来は見え
ないと思うのです。

何故私が今を生きているのか、
どうして自由に過ごせるのか。

もちろん私の御先祖様が命を
繋いできてくださったからでも
あるのですが、その他にももっ
とたくさんの方が、家族ではな
いけれど私たちの命を繋いでく
れたに違いないと思うのです。
私の今のために、必死に生きて
きてくれた誰かの御先祖様を忘
れ、自分は遊んで終わる、そん
な人生でいいのか？ そんな気
持ちはです。

人間は二度死ぬ、本当のこと
だと思えます。

軍に動員された兵隊さんは、
人数が多くてとても一人一人に
目を向けることは難しいですが、
なるべく心を寄せたいと思っ
て、大変な時代を家族や仲間
のためにと戦死されました

方や、また何とか生還して今の平和な日本の礎を築いて歳を取られて亡くなられた方もいらっしゃるのに、その方たちのことをどうして忘れていいものでしょうか。

今のメディアも、夏のこの時期になると戦争のことを取り上げたりテレビで放映したりしますが、戦史に詳しい方に聞けば嘘も多いし報道の内容も偏っていると仰っていました。

私たちが身近に手にとる本も、著者の意見や考えに偏っていることもあり、なにを信じていいか分からない時もありますが、気持ちだけでも変な方向に向かわないように真実を見失わないようにしたいです。

高校では美術を学んでいて、三年生なので卒業作品の制作をしなければならぬのですが、その作品の内容も「戦争」についてのことになりました。

油画ですが、卒業作品展示会に来た方の心に少しでも残ればいいなと思いながら制作しています。

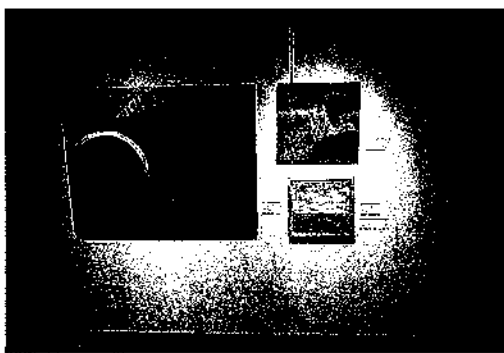
昨年の秋頃、コロナによる自粛が一時緩和されたタイミングで、母親に引率されて予科練平和記念館と雄翔館それに筑波海軍航空隊記念館を見学に来てくれました。そして今回、その時の約束を果たすために、ご招待をいただいで卒業作品展が開催されている横浜市民ギャラリーを訪ねました。

ギャラリー三階のフロアー一面に、卒業生たちの作品が所狭しと展示されていました。いずれの作品も生徒さんの意気込みが感じられ、とても高校生の作品とは思えないような秀逸な作品ばかりでした。

そんな中、Mさんの作品は絵画と映像作品の展示がなされていました。学校から提示された課題テーマは「〇(まる)」で、絵画は三作品が展示されていました。

戦闘機の胴体に描かれた日の丸が印象的な「日の丸に懸けた命」と表題が付けられた作品、また残された航空兵が真っ赤な夕焼けの空に向かって今まさに飛び立とうとする特攻機を見送

る「夕刻」と表題が付けられた作品、さらには平穏な大海原とどこまでも青く澄み渡る夏空の中を、三筋の航跡を遺して飛び去って行く戦闘機を描いた「無題」と表題が付けられた作品。いずれもキャプションには「平和の土台を培ってきた先人が背負ってきた歪のない日の丸こそ究極のマルである。」と記されています。



Mさんの3作品

また、映像作品では、終戦間近のある日、それぞれ兵隊となつた三人の同級生が集まって将来のことを話し合う、その中の

一人将来は画家を志望する芳田實と名乗る隊員が、特攻を志願したという。戦争が終わって再び集まったその場所に芳田はいない。
生き残った同級生二人は、このことをきくと将来に伝えていこうと誓い合つてエンディングを迎える。表題には「時の人」と記されています。



映像作品「時の人」

十数分間のドラマですが、企画構成から絵コンテも脚本も衣装も撮影も編集も総てMさん一人でやったといひます。もちろ

ん役者さんは同級生二人の友情出演とのことでした。

それにしても、Mさんの入会の動機にもあったように、「過去を見ずに未来は見えない」の言葉のとおり、過去の事実を真摯に向かい合い・見つめ・感じ、それを将来に伝えて行こうとするMさんの信念が集約された作品で、つい見入ってしまいました。

きっと将来は美術関係やクリエイターの道へ羽ばたいていくってくれるものと期待しつつ会場を後にしました。

「卒業したら時間に余裕ができるので、なにか海原会の為に力になれることがあれば、何でもお手伝いします。」と感染防止のマスク越しに、久しぶりに十代の若者のさらさらと輝く瞳を見たような気がします。

(事務局 平野)



こちらからも作品の視聴が可能です。

卒業作品展

テーマ「自由・自らへの戒め」

作品名「時の人」

海原会会員

松下 由佳

筆者の松下由佳さんは、神奈川県在住の現役の高校三年生（この記事を皆様が読まれている頃には高校を卒業されていることと思います。）です。

高校のデザイン美術コースでの勉学の傍ら、予科練・特攻隊など近代の戦史に興味を持ち、勉強がしたいと、昨年八月に海原会ただ一人の現役高校生会員となりました。

そして、迎えた令和三年二月に開催された卒業作品展で発表された映像作品を制作するにあたっての考え方を、この度機関誌予科練に投稿していただきました。

なお、制作した作品は、現在海原会のホームページにアップしていただきますので是非ご覧ください。

(事務局 平野)

【はじめに】

この作品は演技をしてくれた同じクラスの友人二人、デザイン美術コースの先生方、衣装を貸してくれた知り合い、その他多くの友人の協力をいただいて完成させられた作品です。

おかげで良い作品作りができました、ありがとうございます。ここに感謝を記します。

【作品名「時の人」の由来】

人間は遅かれ早かれ寿命が来て死ぬ。寿命の期間でしか生きられない私たちは、昔に生きていた人の様子も分からないし、百年後に生まれてくる人のことも分からない。その時同時に生きていく人のことしか分からない。

どの時代であつても歴史の中で生きた人はその時間にかいないが、確かにその人たちは彼らの時間の中で、今の私たちと同じように生活をしていたし、同じように生きていたことを伝えたい。

地球上全ての生きものは、一度死んだら二度と全く同じ個体は生まれにくることはない。もし生まれたとしても魂が同じとは限らない。人間でいえば、たった約八十年の寿命をかかえて、その八十年を過ぎたら死んでしまうかもしれないし、その前に死ぬかもしれない。

地球が生まれる前から続く「時間」という枠の、細胞並みに小さな時の中に私たちは今生きている。「今を生きる」とその先に続くのは、未来だけしかない。

なぜこの世界では先にしか進めないのか。

「前の反対語は後」なのに、この世界の理には「前」しかない。でも、後ろがあるから前がある。後ろの部分はこの目では見られないけれど、その後ろの世界で生きた人が、決して見ることでできない前で生きている私たちにその時のことを偶然にも残してくれている。それが歴史だ。

歴史が残っているというもの、奇跡以外のなにものでもない。過去の出来事なんてもちろん見

たことはないが、それは本当にあった出来事だ。でも自分の目で見ていないから実感がない。

今を必死に生きている多くの人にとって、尚更過去のできごとなんて気にならないし、興味もないのかもしれない。

だが、今私たちが生きてるように、先人たちも同じように後ろの世界で生きていた。先人たちがその時に生きていた人であるように、私たちもいずれ「その時に生きていた人」になる。この因果のような事象を示すためにも、「時の人」という作品名をつけた。

【あらすじ】

この作品のあらすじは、「太平洋戦争末期、海軍飛行兵の主人公芳田と、陸軍飛行兵の高橋、そして水兵の長田の幼馴染の三人が集まって話をしている場面から始まる。特攻で出撃することになった芳田は画家になりた夢を語るが、かなわないことに落胆する。

出撃直前になり、高橋と長田が芳田を心配するが、すでに覚

悟を決めている芳田の後ろ姿を見送ることしかできない。

戦後、高橋と長田は出会い芳田の話をする。芳田はここにいるが、家族や友人を守るために、彼が特攻でいったことを未来の子に伝えたいと語り復興を目指していく。」である。

この作品を制作するにあたって、題材になった出来事がいくつもあった。

まず一つ目は、

「芳田は絵を描くのが好きで、将来は画家を目指していた」という設定だが、これは私が高校一年生の夏休みに長野合宿で行った無言館が元になっている。無言館は長野県上田市にある美術館で、戦没した両学生の絵画（遺作）が展示されている。戦災に巻き込まれ戦死、戦病死してしまつた両学生の遺品や絵画を見ていると何だか苦しく感じた。この苦しさは何だろう。

今思えばそれは、「私は今こうして自由に絵を描いているし、これからも描き続けるだろう。

だけど、ここに飾られている絵を描いた人たちは描きたくても描けなかったのだ。」といった感情で、それが懺悔したい気持ちに似ていた。「課題苦しいな、こんなの制作期間中にできるわけないよ。」と愚痴をこぼしていた自分が恥ずかしく感じたのだと思う。

描きたくても描けなかった彼らと、自由に描ける環境と時間があるのに愚痴を言っている私。比べたら私は贅沢だった。

書籍「まんが少年、空を飛ぶ」

という本の著者として名前のある山崎祐則さんは、海軍の特攻隊員として出撃された方で、絵を描くことが特に大好きで得意だったそうだ。本を買って読んだが本当にかわいらしくて上手で、イラストチックな絵を描く彼は十九歳で亡くなられた。無言館に展示されている戦没、両学生の絵を見て、山崎さんの絵を見て……。感じるものが多くあった。テーマにもあるように彼らにはあったはずの「自由」がなくなつてしまつたというこ

と。どんな気持ちでいたかということ。

そして、自分への戒めとして、この感情や思いを作品として表現して、見る人に伝えたかった。

二つ目は、

戦後に戦争体験者の方が積極的に慰霊活動をしている（参加している）という。

戦時中に亡くなった戦友や家族を思つて参加したり開催しているという話を見たり聞いた。それは日本国民のほんの一部の人かもしれないけれど、その方々は戦争で亡くなられた方を想う気持ちが強くあり、辛い記憶だから忘れようなんてことはほしくないで、亡くなった彼らの事を想い続けているに違いないと強く感じた。

私は「戦争で知り合いが亡くなる」という場面に会つたことはないが、そもそも戦争を知らないが、そのとき亡くなられた方々を忘れないで想い続けることは大切だということは強く感じた。

そして大切だと思えるから、今も資料館や平和記念館にその当時を体験した方々の証言記録や様々な史料を残していくべきだと考え、自分自身も積極的にボランティアとしてそんな活動に参加していきたいと考えている。

三つ目は、

戦史研究を行う自分自身のアイデンティティーの問題だ。

戦史研究に対して色々考えている時に、ある疑問が浮かんだことがある。それは、当時の写真が載っている写真集を集めることや個人にポイントを当てて調べるのが果たして本当に正しいことなのだろうかという疑問だ。

今自分がしていることは、白らの好奇心を満たし、自己満足で終わっているのに過ぎないのではないか。そもそも自分がこうして特攻や戦争を調べ始めたきっかけは何だったか。こんな曖昧な意思で調べていて、相手にとって失礼ではないか。

このままでは「かっこいい」

「好き」という気持ちだけで走り、自分自身の趣味の範疇だけで終わって、得たことをどこにも発信せず自分だけがいい気分という結果になってしまうのではという不安があった。

戦史の研究というのは、生半可な気持ちや考えで行うことではない。

この戦争で苦しみ悲しんだ方が沢山いて、その上で生かされている私がいるのに、間違った思考（思想）で研究した内容を発信しても何の価値もない、ただの自己満足だ。自分が変な方向に曲がったまま終わらせる研究をするくらいだったらもうやめてしまえ、と考えたこともあった。

それでも、やっぱりこのままではだめだと鞭を打った。「やめてしまったらだめだ。戦没両学生のことや今まで学んできたことを思い出すと、戦争が終わるまで必死だった、今の平和の土台になられたご先祖様のことを本来に伝えていきたい。思想信条の右左を誇張せず、本当にあった事実を残していきたい」と

初心に帰ることができた。

このような悩みを乗り越えて、わたしの今の生活があるのは縄文時代から始まり、時が進んで七十六年前に生きていた軍人さんや、戦後復興に励んだ方が今まで頑張ってきた。そしてそばにいてくれる家族がいるからであり、そのことにまず感謝しなければならぬということも再認識した。

そして、私が戦史研究をしているのはきつと意味がある。今まで調べてきたことも無駄ではないということはこの作品制作を行う過程で確信できた。

こうした経緯や思いを作品として残したいと思い、多くの方に協力していただきながら作品を完成させることができた。

これから先も、自らの使命を心にきちんと受け止めて活動していきたい。



死線を越えて ③

海原会会員
甲飛十六期 松室 将幸

この記事は、松室将幸氏が平成二十六年に海上自衛隊小月航空基地において、航空学生の皆さんに講演された内容を、書き起こしたものです。

同じく駅頭で役所関係の人が二、三人机を並べて何かと世話をしている様子なので「実家の焼け跡を探し、両親兄弟の安否を尋ねたい」と申し入れると、早速無料の雑炊食券を四枚ほど手渡され、最寄りの炊き出し所（臨時給食所）の場所を教えてもらったのですが、同時に「広島からなるべく早く立ち去るよう」と告げられ、理由を聞くと「広島は特殊爆弾で体に悪い光線で汚染され、今後七十年間人は住めないし、また草も生えない」と告げられたのです。

なにはさておき、今夜寝るところを探さなくてはと、見当をつけて町の中に歩を進めました

が、見渡す限り瓦礫の山、見覚えのあるはるか彼方に見える中国新聞社の原形だけを残した焼けビルを目標に歩むうちに、焼け跡の中に子供の時から見覚えのある台所の跡、崩れているが風呂釜と流し場のタイルの跡、中庭の石積み、漬物蔵の地下室、やっと生家の跡を見つけました。周りを見渡しても目の届く限り人の姿を見い出せません。そのうち遠くに何かを探すが、三人ほど見えました、それもしばらくして何処に行ったのか見えなくなりました。

なんとかその晩だけでもと考へ寝るところを探しましたが、寝られるような所は何処もありません。

その時ふと思いついたのが、焼け跡に残る風呂釜の中でした。昔は鋳物で出来た五右衛門風呂でした。丁度底の水を抜く詮は木製であったため、綺麗に焼滅しており、お陰で雨水も溜まっておらず、底に敷物をして平にして、周辺で容易に見つけられた焼けトタンをとってきて雨を凌ぐ急造の屋根を設え、そこか

ら一週間、その中で膝を抱えて寝ることができました。

静寂の月明かりしかない無人の焼け跡、この情景は到底他人には想像もできないと思います。恐ろしさでなかなか眠ることが出来ず、慣れるまでは気が狂いそうでした。

夜が明けると手荷物を風呂釜の中に隠し、上から見えないように拾ってきたガラクタで目隠しの蓋をして、いたるところにできていた被災者収容所を訪ね歩き、両親兄弟の生死を確かめに廻りました。被災者収容施設巡りはそれから後も数年間続いたのです。

遺体を見るまでは皆が、何処かで生きているような気がして、諦めることが出来ず苦しみました。

しばらくは、復員証明書を見せて、収容所でささやかな給食を頂きながら彷徨い歩きました。そんな時、ふと戦前大阪に嫁いだ姉のことを思い出し、大阪に行く決心をし、出発する前に唯一の私の実家の事を知る岡組の親分の所を訪れ、「焼け跡の風

呂釜の中で寝起きして両親兄弟の行方を捜したが未だ生死がわからない。一度行ったことがある大阪にいる姉を訪ねてまいります」と告げたのです。

岡さんが「僅かだが」と五百円の饒別をくださったのです。なぜ岡組の親分さんがこの様によくしてくれるのか、少し話をしておきましょう。

私の実家は、東の花街に本店西の花街に支店を持つ広島では割とおおきな呉服とそれに伴う小間物等の雑貨店を営んでおりました。

花街は東西の遊郭街、芸者街、置屋に料亭を主な顧客としていたせいで、割に何時も町の顔役や軍閥係の人が出入りしておられました。

実家の二階、十畳の客間には常時お客さんが来られて、酒宴も度々行われていました。

子供の我々には誰が誰だか、何をする人もわかりませんでした。したが、米客の途絶えない我が家でした。

時々子供は、お客さんの邪魔にならないように、女中さんが

外に連れ出してくれ、いろんな所に行かれるのが楽しみでした。その様な家庭なので、岡組の親分さんも「松室の親父さんには大変お世話になった」と話してくれていました。それで私に良くしてくれたのでしよう。大変義理堅いお人でした。 続く

米海兵隊創設273周年
祝賀式典にて 右 松室氏



豫科練の戦争③

久山 忍 著

翼を奪われ陸戦特攻隊へ

甲飛十四期 戸張 礼記

硫黄島の上陸作戦を前にして、ウルシー環礁の泊地を抜鏑したアメリカ第五八機動部隊が、昭和二十年二月十六日の早朝、東京の南東わずか二〇〇キロの洋上に現われた。硫黄島への日本航空戦力の増援を阻止するため関東地区の航空施設を制圧するのが目的だった。

まだ夜が明けきらぬうちに艦載機の発進が開始され、F6F、F4U戦闘機、TBM雷撃機(爆弾装備)、SB2C急降下爆撃機がぞくぞくと発艦していった。海軍機による日本内地への初空襲である。

米艦載機は高度を四メートルと低くって侵入してきたため、沿岸のレーダーはこれを補足できなかつた。そして午前七時五分、千葉県白浜の陸軍監視哨が、「敵小型機編隊、北上中」

と第一報を伝えた。

陸軍第十飛行師団は、戦闘機隊の即時発進を下令し、海軍三〇二航空隊も夜間戦闘機を空中避退させ、邀撃のために雷電と零戦が出撃した。

敵機は、まず太平洋沿岸に近い千葉、茨城県の館山、茂原、鹿島、神ノ池、木更津などの海軍基地や水戸陸軍飛行場などを襲った。午後からは更に深く侵入し、厚木基地、印旛、成増、調布飛行場を攻撃、続いて群馬県の中島飛行機大田工場を爆撃し、日本軍基地にかなりの損害を与えた。アメリカ艦載機の侵入は、午後三時四十分までに計七波、一四〇機(日本側の認定数)におよび、一部の敵機は夕刻まで攻撃を続行した。

三〇二航空隊は午前七時十五分から出撃を開始した。相手が戦闘機を含む艦載機であるため、空中戦の性能が劣る雷電(十八機)には熟練パイロットが乗った。主戦力は計三十機(零戦と雷電)となった。

零戦隊を率いた分隊長・荒木俊士大尉は一回目の出撃から戻

り、再度、発進しようとしたがエンジンの筒温が上がって離陸が困難になった。しかし大尉は筒温を下げるためにカウリングを外して発進し、藤沢北の丹沢上空でF6Fと空戦に入り、一機を撃墜、二機目を補足するところで被弾した。荒木機は藤沢基地までたどり着いたが、姿勢を崩して格納庫に接触し、墜落して戦死した。荒木大尉の頭部には十二・七ミリ弾が貫通していた。

「よくぞ藤沢基地まで機を運んだものだ」
と基地隊員が驚嘆したと言われる。荒木大尉は、整備員の夜食まで気を配る人望のある隊長だった。

森本宗明少尉は荒木大尉の列機としてF6Fと戦闘し、大尉の一機撃墜を見届けている。その後、森本機も被弾して火災が生じたが、風防を開け、機体を横滑りさせて消火し、難を避けた。

昭和二十年二月十六日午前七時過ぎ、基地にいた吉田上飛曹(甲六期)は、西方から侵入し

たF4U二機を発見した。敵の襲撃には慣れているので防空壕に入って敵機の機銃掃射をやり過ごし、手近の機に乗って離陸し、他の機と五、六機で邀撃にむかった。

吉田機は、はるか房総半島の東方に東京方面に向かう敵大編隊を発見し、それを追って船橋上空を飛んだ。その途中、同期の泉茂美上飛曹(甲六期)が低く垂れこめた雲を抜けようとして上昇し、間もなく火を噴きながら墜落していった。雲上にいた敵機に食われたのである。

吉田機は南条正上飛曹(甲七期、十七日戦死)を列機にしてさらに飛び、途中で陸軍の四式戦二機と編隊を組んで敵の艦載機を追った。しかし補足できないまま燃料が少なくなり霞ヶ浦基地に着陸した。警報解除の後、吉田、南条両上飛曹は館山への帰途についた。その途中、残っていたF6F(十六機)に攻撃されて被弾したが、辛くも館山に滑り込んだ。二月十六日の戦果については次表のとおりである。ただし被害も大きかった。

昭和二十年二月十六日の空戦

時刻・搭乗員・戦果

- 8・30 山下格(中尉)
- 水戸北方上空においてF6Fと交戦。一機を撃墜。
- 9・15 仲山孝二(二飛曹)
- 銚子上空でF6F8機と交戦一機を撃破。
- 9・20 上田孝次(上飛曹)
- 涸沼上空でF6F、一機を撃破。
- 9・50 登内剛三(一飛曹)
- 銚子上空においてF6F、一機を撃破。
- 10・00 広留四郎(上飛曹)
- 水戸陸軍通信学校上空においてF6F、三機と交戦。一機を撃破。
- 10・15 伊藤毅(中尉)
- 大洗沖を西進中のF6F、六機と交戦。一機を撃破。
- 10・25 高橋止夫(大尉)
- 大洗沖を西進中のF6F、六機と交戦。一機を撃破。
- 10・30 吉田克平(中尉)
- 涸沼上空においてF6F、七機と交戦。一機を撃破。
- 13・10 福島俊一(中尉)

水戸北方上空においてF6F、四機と交戦。一機を撃墜。

13・20 小畑高信(飛曹長)

大洗沖においてF6F、三十機と交戦。三機撃墜。戦死者(二月十六日)

小林幸三 大尉

山下 格 中尉

池田秀親 中尉

秋山武男 中尉

福島俊一 中尉

岸 雪雄 中尉

米山六弥 上飛曹

上田重二 上飛曹

結城七郎 一飛曹

中山秀二 二飛曹

斎藤敏郎 中尉

以上の十一名は自爆である。他に被弾した機は六機(うち一機は大破)であった。

(友部町教育委員会発行の「筑波海軍航空隊―青春の証―より」)

昭和二十年といえは硫黄島の争奪戦が始まる時期である。この頃になると日本の航空機は僅かしかない。空を覆うような数の敵機に対し、圧倒的に少ない数の日本機で邀撃するという状

況であった。勝敗は見えており、勝てる見込みはなく、飛べば撃墜されるのがわかっていた。そういう状況において彼らは空に

にあり、敵と戦ったのである。連合軍による空襲被害は地上

において発生し、その惨憺たる被害状況は今も語られることが多いが、敵の空襲を阻止しよう

として戦った空の日本兵たちが居たことも忘れないでいただきたい。

予科練教育中止

昭和二十年三月、予科練教育は中止となった。敵艦載機が日本の上空に侵入し、土浦航空隊

でも邀撃戦が展開されるようになったため訓練ができなくなったのである。

硫黄島戦は、昭和二十年二月十九日に連合軍が上陸を開始し、三月には硫黄島の滑走路を開始し、軍が使用を開始した。硫黄島は

日本から約一〇〇キロの距離にある平田な島である。片道一〇〇キロであれば、往復二〇〇

キロを後続でできる小型戦闘機も日本空襲に参加できる。B

29に戦闘機が随伴して来襲し、

しかも空襲に来る敵機の数が飛躍的に増えたのは硫黄島戦の後である。

予科練が中止になったのは私が入隊してから十カ月目のことであった。

昭和二十年三月十五日、我々はこの日をもって土浦海軍航空隊を離れ、三沢航空隊(青森県)に転隊した。

当時の様子を、同期の氏家昇君の日記(「さらば土浦海軍航空隊の頃」)によって思い出してみたい。

三月十五日(木曜日)晴れ

午前三時、土空出発。

隊伍を組んで土空を出る。早朝のためか見送りの帽振れがない。いささか淋しい門出である。衛兵だけが拳手の礼の後でさかんに手を振ってくれる。

春とはいえ、未明の風の寒さが身に沁みた。通い慣れた海軍道路をただ黙々と歩いた。闇の中を千余の隊列が影をつくり、靴音だけが潮騒のように鳴っていた。後にした兵舎はまだ暗闇に眠っている。霞

ヶ浦の岸辺から微かに波の音が聞こえたが、湖水面はみえなかった。午前五時十分、土浦駅出発。常磐線土浦駅発の臨時列車に乗る。土浦もまだ人影はなかった。

三月十六日（金曜日）大雪

午前九時三十分、青森、古間木駅着。雪の中、三沢基地へ。一泊。

三月十七日（土曜日）雪後晴れ

午前八時三十分、基地出発。三沢空人隊。六十三分隊は二十一分隊、六十五分隊は二十二分隊、六十八分隊は二十三分隊にそれぞれ編成替え。

三月二十一日（水曜日）晴れ

硫黄島玉砕の発表を聞く。無念なり。南の空に向かって黙禱を捧ぐ。この仇は必ずとつてやる。九州地区に敵機千五百機来襲する。

司令の訓示によると、戦況はいよいよ本土決戦の様相である我々もついに陸戦隊か。夢だった飛行機乗りの夢は儚く消えた。もうどこでもいい。

戦えるなら、地の果てでも海の底でもいいと思つた。

懐かしい記録である。私も氏家君と同じ列車に乗っていた。列車が動き出した時、母が届けてくれた日本刀の袋を握りしめた。そして、窓から夜明け前の土浦の町を眺めながら、

「俺はもうこれで帰れないかもしれない。母よ、姉よ、弟よ、さらばだ」と思つた。

母は日本刀だけでなく、父の形見のらくだのシャツを隊門まで届けてくれた。母はどうやって我々が北に行くことを知つたのだろうか。そのとき私は母と面会できなかった。いまごろ母は何をしているだろうか。どこにいても、何をしていても、私の身を案じていることだろう。

列車は走る。空襲を避けながら進むノロノロの臨時列車である。やがて朝靄のなかに町も消え、最後まで見送つてくれた筑波の峰も見えなくなつた。岩沼で東北線に乗りかえた。盛岡を過ぎた頃だろうか。気が付くと窓外はすべて雪に閉ざされていた。

三月十六日、午前九時三十分、青森県の古間木駅に着いた。土浦を出てざつと二十九時間である。機関手もさぞかし大変であつたろう。みちのくの三沢はとにかく遠い。基地は曖々たる雪の底にあつた。

駅に降り立つたとき雪はまだ降りしきり行く先さえ見えない。除雪したかほそい一本道が真っ直ぐ続いている。除雪した雪が左右に盛り上がり、道の両側の家屋の軒先まで埋もれていた。こんな大雪は見たことがない。「こりゃあ、とんでもない所へ来たもんだ」と心中思つた。

兵舎は木端葺きの平屋で寢床は木製のベット。風呂は木の浴槽でお湯はドラム缶で沸かした。寒風が強く、風呂帰りの手ぬぐいがすぐに棒のように凍つた。

風雲急

三月二十一日の夜、我々はラジオで硫黄島玉砕の報を聞いた。皆で東南に向かって黙禱を捧げる。

敵が日本に迫っている。いよ

いよ本土決戦に近い。それなのに我々は北の外れの基地にいる。こんなところにおいて本当にいいのだろうか。ヒリヒリするよくな危機感が日本を覆うなか、我々がいることは静かだった。

四月、五月は特筆すべきことは何もなかった。もちろん、通常の日課や基地での作業、グライダーや陸戦の訓練はあつたが、上空での訓練に比べれば遊びのようなものだった。

ただ変わったことがあつたといえは、作業服の縫い目にシラミの行列が発生し、大鍋で服を煮たことくらいだろうか。他の分隊では隊外の原野でウサギ狩りをやったり、海岸で地引網を曳いたりしたようだ。

模型飛行機作りが流行つたのもこのころであつた。誰が始めたか定かでないが、競争のように一斉に作り出した。材料の木は基地のどこにでも転がっていたし、題材の飛行機は目の前にあつた。

皆、温習の時間を利用して夢中で木を削りだした。

続く

緑十字の白い二番機②

種山平一

(乙飛十六期)

機内は急にざわついてきた。窓という窓から顔を出すようにして無言で下を見ている。顔は血の気が無い。いくら上級士官でも近代戦から遠ざかっていたり、頭とペンだけの内地勤務の上官や、官庁勤務の役人に、私達のような経験者と同じように落ち着けと云ってもそれは無理と云うものだろう。

伊江島到着

午後一時半ごろ着陸。滑走路の両端は裸の兵隊で真つ黒な人の山である。白人兵も黒人兵もない。みんな日に焼けて真つ黒でカメラをさかんに向けている。哨兵が三メートル位の間隔で警戒に当たっている。風防を開けて見ると、熱気がワーツと機内に入って暑い。

使節団の左側に私たちは整列した。米軍士官らしい一団の中から、一人が前に出てタドタドしい日本語で何か云っている。周圀は又もや真つ黒な人の山で、カメラのシャッターの音が風の笹音に似て喧しく、よく聞き取れない。

暫くすると使節団は、米軍のダグラス四発輸送機で離陸して行った。残されたのは私たち搭乗員だけである。

さあこれからどうなるか。黒い林がぞろぞろと寄ってきてカメラを向けてガヤガヤ騒いでいる中から、「カミカゼバカ」「オーカミカゼ」と云ったと思うと、ヒヨコンと敬礼する奴もいる。哨兵が彼らを遠くに押しやってくれたのでまずはホツとする。

日本語のうまい二世の軍曹が来て、使節団はマニラへ行つて降りは何時になるか判らないが、それまで諸君はここで泊ることになる。身の安全と機体の管理は責任を持つから、安心して指示に従ってほしいという。

やれやれと安心してジープに便乗し宿舎に向かった。二台の

ジープの前後はオートバイが三台ずつ護衛してけたたましいサイレンの音が響く。

この島には草も木も、緑というものは全く何もない。まったく赤茶けた岩石の塊である。草も木も畑もあつたが、砲爆撃でみんなフツ飛んだに違いない。一坪に何発もの砲弾が落ちなければ、こうも凄惨な様相にはならなかつたであろう。そんな中で戦つた人達は果たして正気でいただろうか。

「山川草木転た荒涼」という詩があるけれど、乃木將軍ならずともこの現実には直面したらなんと書き表すだろうか。無性に腹がたつて来た頃道路の岐かれ道に、ゼロ戦の胴体が半分、丁度日ノ丸のあたりから折れたのを尾翼の上に立ててある。

尾翼の両側に矢印が付いていて、何か書いてある。何と、道路標識だ。ゼロ戦の道路標識！敗戦のみじめさをつくづく味わつたのである。

宿舎は、大形テント。中にはベットが整然と並んでいる。絹の蚊張がついていてなかなかの

ものである。食事時間は私たちが早く、例の二世が付き切りで面倒見てくれている。

トイレは丸穴式、洗面器は鉄兜を逆さまに使っている。予科練の艦務実習で戦艦長門に行つた時以来の丸穴トイレは懐かしかつた。

夜は、何もすることが無い。話が出てもし口クなことには云われない。明日は殺されるぞ。いや米本土に連行されて行かれて、サラシ者にされるぞ。そんな話をしているとき二世が来て、映画を見に行かないかと云う。出て見ると大きな野外劇場があつて、野球のバックネット見たいなの白いシートをつりさげ、既に大勢来ている。とそこへ善行章を逆さに四本位つけたのが来て、ペラペラとやっていたが、私たちはすぐテントに帰された。やっぱり夜は危険らしい。

消灯は十時。ベットに入る。眠ることも出来ない。眠れないのだ。大体ベットなんて高級なものに寝たことが無いのだ。

予科練入隊以来今日までの上浦じや血の出る様な釣り床訓練、

飛練に行ったら土浦なんてもんじゃなかった。鬼の木更津では先輩の分まで面倒を見て、サイパンでは、バラックのアンペラにごろ寝して、ダバオでデング熱の時はトラツク島（春島）の十人小屋よりひどい病舎に放り込まれた人間が、こともあろうに敵地の夜が紺の蚊帳付きのベットとは――

「国破れて山河あり、城春にして草木深し」と云う。ところがこの島は、山河どころか、草木どころか、草一本木一本無いではないか。

伊江城山でさえも変形したという。私たちの仲間が、空に、海に、陸に、尊い鮮血を流したこの地で、何で眠れるものか。動く物は虫一匹、鳥一羽でも見逃さず、呵責なく飛んでくる銃砲弾に全鳥が変形してしまつた伊江島で眠れという方が無理と云うものだ。

いろいろな事が頭に浮かんでくる。昭和十六年五月一日、土浦に入隊した時に、「海軍四等航空兵ヲ命ズ」と云われた司令、青木泰次郎大佐の見事なヒゲ。

指導官大森少佐、B25東京空襲の一機が土浦上空に飛来した時司令台で訓示していた上岡少佐のドラム缶に手足を付けたようなカラダ。

「艦隊勤務の作詞者」高橋俊策中佐が、教員がたるんでいって、練習生の前で教員整列をかけ、そのハネツ返りに、その夜は予科練始まつて以来と云う大嵐が各分隊に吹き荒れたこと、机を並べて勉強していた鹿兒島出身の吉本武盛は第二神風神武隊で突撃してしまつた。

バスケットの名手塚本良止、一学年から煙草を吸つた竹内富男、飛練でやさしくしてくれた乙飛九期の高坂浪治教員、ドラム缶二十本を空気抜きにしたラバウルの防空壕、台南でバナナを二十円買つたら一式の胴体が一杯になつたことなど考えているうちにいつの間にか眠つたらしい。

八月二十日。朝食後ジープに分乗して飛行場に行く。聞くところによると使節団は、今日戻つて来るそう。相も変わらず鳥全体に真っ黒な日焼けした兵

隊が滑走路の拡張工事をやっている。

白い一式の一番機が列戦にゆつくり引つ張られて出て来た。私たちの二番機も牽引車にひかれてゆつくりと動き出した。米士官の指揮で動いている。一式の左翼下面の辺に太い棒杭のあるのに気づいた私たちは、大声で騒いだ。牽引車の米兵は何を勘違いしたのか、グイと速度を上げたので棒杭は、左翼下面をバリバリと掻き破り、そのはずみで方向が変わつた二番機の尾部が側溝にドスンと落ちて後部胴体の側面を破つてしまつた。

さあ大変である。帰れなくなつてしまつた。米士官が来て何やら大声で兵隊に指示している。私たちが何とかせねばと思うのだがこんなとき頼れるのは安念兵曹と小柳兵曹だけである。

間もなく米軍の整備班らしい一隊が来て、大勢で修理にかかつた。私たちが一緒に手伝つた。さすが物量の国である。機械力をフルに使っている。時のたつのも忘れていたら、いつ帰つたのか使節団が帰ってきている。

その顔の何と凄いな。目ばかりギョロギョロと光り、頬骨が飛び出し、顔色は蒼白で、まるで死地を脱してきた攻撃隊員の様である。

俺が北硫黄島上空でB24と交戦した時もきつとこんな顔だつたに違いない。とにかく一刻も早く日本へと帰るのだ。

何時頃修理できるのか、夜間飛行は出来るか、米軍士官を先頭に私たちが一緒に汗みどろに修理している横に来て、うるさく聞く。

両機長とも操練出身のたたく上げの士官だ。夜間飛行など屁の河童だが、どうも二番機は手間取るらしい。一番機だけ先に、主な人たちだけ乗せて帰ることになり、夕闇迫る伊江島を後に離陸した。

私たちは、もう一晩泊ることになつたのである。

生きて帰れる保障がハッキリすると心も落ち着いてきて退屈の連続である。夜、例の二世と数人米兵が遊びに来て雑談する。彼らも、これで本当に帰れると大喜びだつた。

ここでひと騒動が起きた。小柳兵曹が居なくなつたのである。さあ大変だ。

二番機の五人だけとなつたテナントの中は大騒ぎだ。

そのうち、小柳め、人の心配をよそに、ニヤニヤしながら帰つてきた。

聞けば、近くにある女性軍パイロットの宿舎にヒヨコヒヨコと遊びに行つて大歓迎を受け、ウイスキー、ケーキ、タバコ、コーヒ、派手な模様のスカーフまで貰つてきた。初めてテナントの中に笑い声が起こつた。

笑い声！

そうだ、久しぶりの笑い声だつた。

八月十五日以来私たちは、笑つていふことすら忘れていたのだ。笑つていふうちに泣けて来た。泣いて笑つて、笑つて泣いた。

二世の軍曹も遊びに来ていた。米兵も一緒に泣いて笑ひ、そして泣いた。

再び母なる

木更津海軍航空隊へ

八月二十一日、見事に修復された二番機は、爆音も快調に伊江島を後にした。

首脳部が先に帰国したので、使節団のメンバーは、若干交わつていようだが、なんとなく厳しい空気が流れている。

昨日の事故騒ぎのせいか、送信機を修理する気にもなれず先に帰つた一番機からなんらかの通報もあるだろうと勝手なことを考へて受信機だけ作動させて待機した。P38が途中まで送つてくれている。

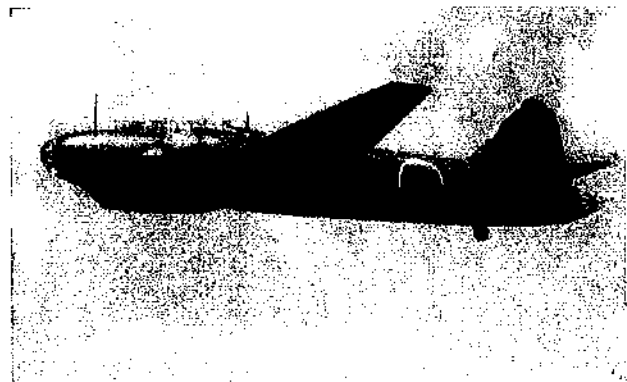
単機飛行は馴れているから河西少尉も気が楽だろう。

「……××××××……」また始まつた。例の頭脳少尉に聞いてみると「サヨウナラ、また遭ひましょう」と書いてくれた。

見るうちに泣けて来た。泣いて笑つて少尉に見せると、ヒョイと振り向き、大きくうなづく。パンクを二、三回、そして外に向かつて手を振つた。

さあ帰れるぞ！生きて帰れるぞ！機はホームスピードになつたのか、それとも気のせいかわいずれにせよ快調である。

「在りし日の一式陸攻機の雄姿」



日本の命運を乗せた、緑十字の白い一式陸攻は、ひたすらわが母なる木更津へ！

最後の大任を果たして木更津へと向かつた。この使節団の一行の帰郷によつて、八月二十六日以降、連合軍の進駐は円滑に行われ、更に九月二日のミズリ一号艦上の降伏調印によつて、日本と連合軍との戦闘行為は正式に終息した。

「ご連絡」

小林会長寄贈の脇差が 展示されます

展示されます

昨年九月十二日に現海原会会長の小林和夫氏(乙飛十九期生)から公益財団法人海原会に寄贈された脇差(銘・助宗 刀身、約五十三センチ)を雄翔館内で展示いたします。

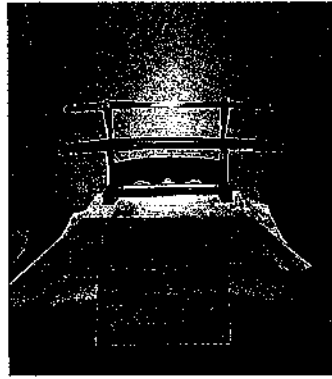
この脇差は、昭和二十年一月小林会長が子科練を卒後の時に、父親の今朝一(けさいち)様が、息子の「武運長久」を願つて、土浦海軍航空隊の面会所においで、本人に授けられものです。

小林会長の「守り刀」として大切に保管されてきましたが、卒寿を無事に迎えられたのを契機に海原会に寄贈されました。



子供の無事を思う親の気持ち
が凝縮された脇差であり、戦中
戦後を通して小林氏を守ってき
た脇差であったことでしょう。
この度、雄翔館に常設展示す
る事になり、令和三年二月に展
示を開始しましたのでご紹介
方々ご連絡申し上げます。

(事務局 平野)



展示の状況が御覧いただけます。

(公財)海原会寄付者芳名簿
敬称略 (前位下四)

令和三年一月二十六日より
三月四日まで

- 五 小西 昭二(乙16)滋賀
 - 〇 加藤 正春(一般)東京
 - 二〇 富澤奈津子(一般)山形
 - 五 福本 貞之(乙21)静岡
 - 五 秋山 孔孝(一般)千葉
 - 五 小田野 厚(甲15)秋田
 - 五 為平 浩一(一般)兵庫
 - 五 谷口 五郎(一般)神奈川
 - 二〇 堤 日米子(一般)静岡
 - 五 金塚まさえ(一般)東京
 - 一〇 久保 和雄(乙24)福岡
 - 五 猪俣 恒一(乙6)宮城
 - 五 吉田 一則(甲12)東京
 - 五 斉藤 義親(乙19)東京
 - 五 後藤田哲朗(甲11)神奈川
 - 五 森 篤司(乙24)埼玉
 - 一〇 藤原 清仁(乙20)埼玉
- 海原会へのご芳志
誠に有難うございました。



第五十四回予科練戦没者慰霊祭行事のご案内

一 慰霊祭

日時 令和三年五月二十九日(土)
午前十一時から

場所 雄翔園
陸上白衛隊土浦駐屯地武器学校内

参加者 (茨城県稲敷郡阿見町青宿二二の二)
公益財団法人海原会役員等に限定

慰霊演奏 甲飛喇叭隊

二 特別写真展

日時 令和三年四月二十日(火)～
五月三十日(日)

場所 雄翔館 特別写真展コーナー
テーマ 「雄翔園の四季」

展示写真提供

三 玉串の奉納要領 武器学校広報援護班 皆木義時氏

会員の皆様で玉串を奉納いただきました方は、ご芳
名簿を作成し、ご遺族代表から予科練慰霊碑に奉奠さ
せていただきますとともに、協力いただいた皆様総意
の生花を奉納いたします。また、後日慰霊祭の様子を
撮影した記録映像をお贈りさせていただきます。
奉納を希望される方は、同封の「郵便振込取扱票」を
ご利用ください。

連絡先 公益財団法人海原会事務局

03-3768-3351

「予科練」第464号5・6月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可

令和3年5月1日発行
(隔月奇数月1回1日発行)

発行人 菅野寛也
編集人 保坂俊雄

発行所 〒140-0013

公益財団法人 海原会
東京都品川区南大井6-16-12
(大森コーポビアーネーズ)

郵便振替
FAX 03-3768-1543
03-3768-1544
03-3768-1545
03-3768-1546
03-3768-1547
03-3768-1548
03-3768-1549
03-3768-1550
03-3768-1551
03-3768-1552
定価500円

お墓

首都圏多数の霊園・寺院墓地をご案内致します。

東京都・足立区 舎人浄苑

0.90㎡～

東京都より公益霊園の認証を受けた、舎人公園近くの都心でも希少な好環境の霊園。

在来仏教



東京都・港区 高輪メモリアルガーデン

0.45㎡～

都心の緑あふれる閑静な住宅街の霊園。環境・価格ともに大好評の立地です。

在来仏教



東京都・町田市 町田いずみ浄苑 フォレストパーク

0.90㎡～

緑豊かな武蔵野・横浜みなとみらいを一望し、四季折々の花が彩る好環境の霊園。

宗教不問



東京都・八王子市 東京霊園

3.00㎡～

四季のうつろいに永遠の時を刻む、行き届いた景観と設備の公園墓地。

宗教不問



お葬式

家族葬から社葬まで、おまかせください。

花で送る家族葬

ご家族だけで、または親しい方だけで気兼ねなく送りたい。そんな想いにお応えする10名様用のプランです。花祭壇は「風」と「塵」の2種類から選べます。



10名様用

会員価格 580,000円～(+税)

自社総合式場から提携斎場まで、豊富な式場をご案内できます。



- おのやホール小平 0120-57-2222
- フューネラルリビング横浜 0120-40-0785
- 常光閣斎場(千葉) 0120-03-5005
- セレモ埼玉営業所 0120-79-8008

お仏壇

ライフスタイルに合わせた祈りのかたちをご提供します。



海原会会員の皆様へは、墓石・葬儀(祭壇費用)・お仏壇を
会員特別価格にてご提供させていただきます。お気軽にご相談ください。

お墓 墓所工事
10%割引

お葬式 祭壇価格から
20%割引

お仏壇 **25%割引**

お問合せは、**海原会事務局へ ☎ 03-3768-3351**

株式会社メモリアルアートの大野屋は
甲飛十四期生 元海軍一等飛行兵曹 大澤静雄の
次男 大澤静可の経営する、お墓・お葬式・お
仏壇までご利用いただける会社です。

大野屋イメージ
キャラクター
市田ひろみ



メモリアルアートの
大野屋

大野屋テレホンセンター

葬儀のご依頼(緊急ダイヤル)24時間受付
「仏事・葬儀・お墓に関するご相談 (9:00~20:00)」

0120-02-8888

メモリアルアートの大野屋
<http://www.ohnoya.co.jp>

関東・PHS
OK
全国無料



全優店
全国優良石材店